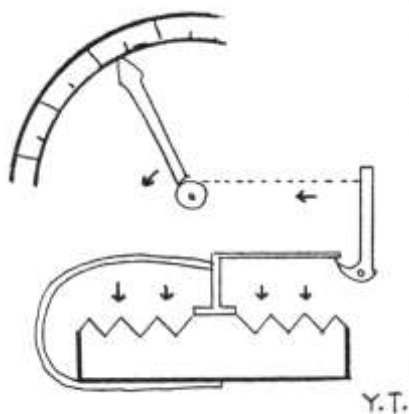


13 高度計で気圧を測るーそして、電話で時間を測るー

私の愛車には高度計が付いている。とは言っても、初めから付いていたのではない。昭和 54 年 8 月の富士スバルラインドライブの前に購入したものである。そして、それは買い換えと共に次の車に場所を移し、今は 6 台目のスバル・レガシィのダッシュボード上にある。

これはアネロイド気圧計と同じ仕組みで、中が真空であってもバネの力でつぶれないようにした金属製の缶が使われている。この缶は大気の圧力が大きくなるとひ

ずみ、小さくなると元の形にもどる。このときの変形を拡大して針で示すようになっている。したがって、山から平地に下りると缶がへこみ、山に登ると缶がふくらむことになる。このことを利用して 0m から 2800m までの目盛りが刻まれている。勿論、気圧は高さだけではなく、そ



の日の気象条件によっても変化するので、目盛板を回して調節できるようになっている。そこで、家を出るときには 52m に目盛りを合わせ、途中の標高のわかっているところで再び調節することが必要である。

高さと気圧の両方によって変化するということは、両方とも正しくは測れないということであるが、逆に言えば、その両方を測ることができるということである。だから、車から取り外して部屋に持ち込むなど一定の高さのところに置くならば、気圧計に変身するのである。

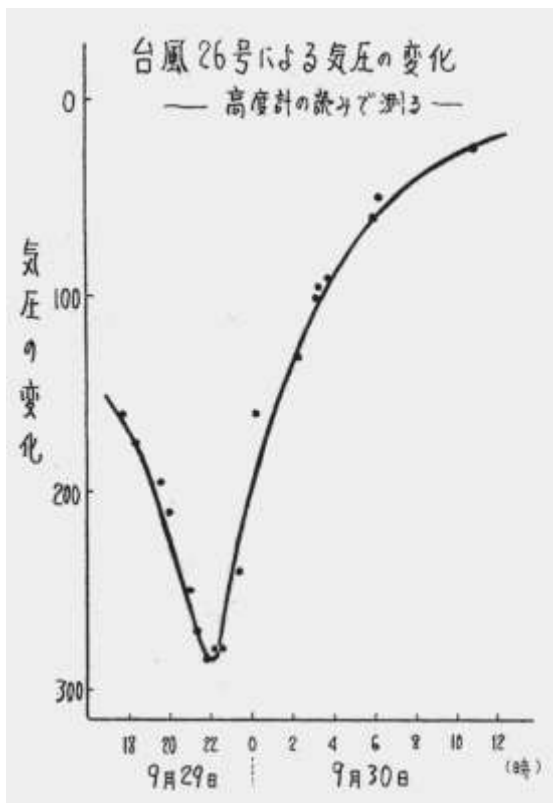
次に示したのは、平成6年9月に近畿地方を襲った台風26号の接近に伴う気圧変化を、この高度計で測定したときのグラフで、朝の会や理科の時間の講話の材料にするように、と配付したものである。

たため、県小学校長会役員会を早めに切り上げて学校に戻った。そして、必要な措置を

終えた後、校長室の机上に車から外してきた高度計を置き、針を生駒小
学校の標高である160mに合わせて測定を始めた。災害の発生が予想されたこの夜は体育館を避難場所として開放するようにとの連絡があり、運動場は消防団の集結場所となつて、ものものしい雰囲気であった。泊り込んだ私と教頭の

ために職員が届けてくれた温かい弁当を食べながら、気圧の急激な変化に目を凝らしたことを思い出す。このグラフでは、午後10時ごろ気圧が最低値となり、台風が最も接近したことがわかる。

これは、もともと高度計として作られたものを気圧の測定に使った



事例である。こうしたもののほかにも測定に使えるものは多い。たとえば、電話の 1 1 7 の時報である。あれを録音して使うと時間の目盛りを耳で読み取ることができる。手が放せない、目が離せないといったときの時間の測定に活用できるのである。